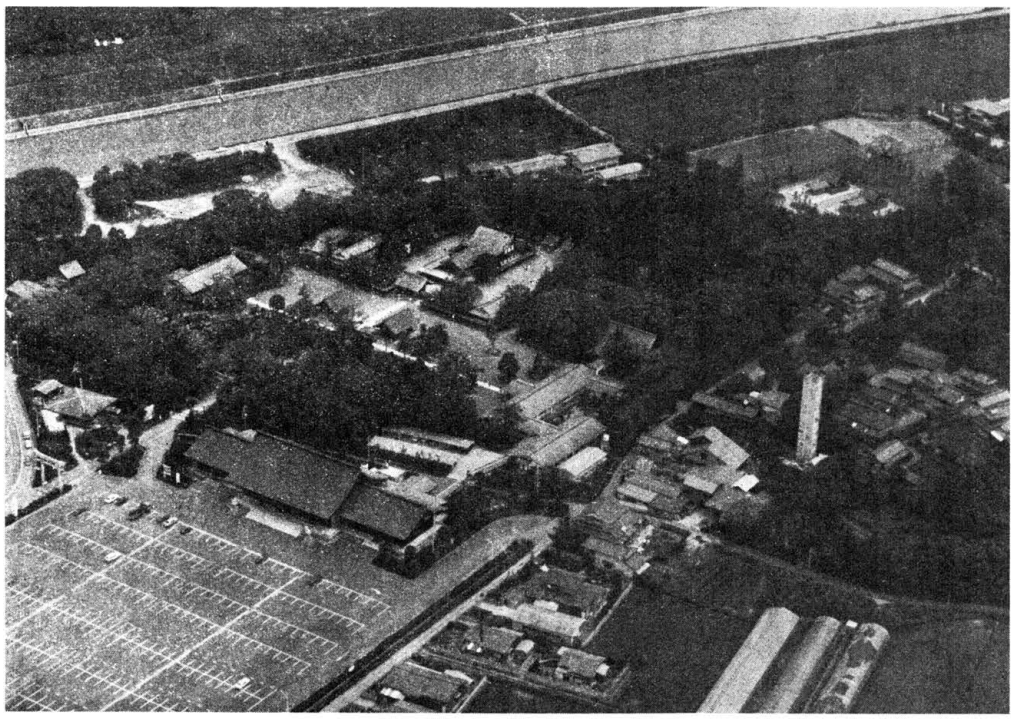
宗像二百号を迎えて



昭和の御造営成る
辺津宮境内全景

【写真説明】　左下「祈願殿」　中央「本殿・拝殿」　中央上「宝物館」　右上「第二・第三宮」
（左上は釣川・県道神湊線、右下は深田・田島部落民家）

宗像
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ㉓ 1311 代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二―三一（〒八一三）電話福岡（〇九二）六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路八条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三四一―三四一（代）～四番 三五一―二三四・XXX番

社報「宗像」二百号の歩み

宮司　葦津嘉之

昭和三十四年六月、皇太子殿下御成婚重儀のお芽出たい年に私は宗像に着任した。

当時久保宮司は、この御婚儀を祝し記念事業を種々考えておられたようで、その中の一つが社報発行であった。

前任地伊勢の神宮で教導部の一員として神宮機関紙「瑞垣」編集の仕事をさせて戴いていた関係上、私に編集計画の立案を命ぜられた。

しかし当時、私は神社が発行する社報について大きな疑問を持っていた。その最大の理由は、内容は優れていても神社界の出版物は全般的に難解で読みにくく、愛読者が少ないことである。当時そのような斯界の傾向に挑戦することは大胆な試みでもあり、従来と異る新しい形態の社報を編集するには多くの難問があった。その他、デザイン、サイズ、日刊か季刊か執筆スタッフをどうするか。配布先、予算等々解決せねばならぬ問題点が多く、手をこまねいていた処、小野祢宜（現神社本庁調査部長）が当社に着任された。

早速これらの点について御相談した処、持前の豊かな経験と理想を生かし、昭和三十六年一月一日創刊号が発行された。当時はタブロイド版表裏二頁のささやかな発行であったが、宗像地方のローカル色を出し、宗像出身の全国崇敬者、遠くはアメリカ、ブラジル迄発送を行ない、当社独特の形態がこの時代に出来上った。

特に久保宮司（現当大社名誉宮司）は創刊以来二百号の今日迄、論説、阿蒙少言は全号を通じて執筆され、其他宗像史話、宗像談話室、漫筆明暗箱、残筆しがらみ草紙等々、精力的に毎回執筆され、その不滅の忍耐と御功績は誠に絶大であり、本紙の生みの親であると同時に育ての親として現在迄、御苦躍いただき、その御熱意に対して深甚なる感謝の意を表する次第である。

また編集担当者も、小野権宮司、太田権祢宜、末安権祢宜、石橋権祢宜、松本権祢宜と代わり、現在は山田権祢宜が担当しているが、各担当者共よく努力し、社内の各職員は日常社務の傍、原稿書き、写真撮影、カット作り、校正、発送迄よく協力し、毎回の責任と忍耐と努力の積み重ねが、二百号の今日を迎えたわけで、そのたゆまざる歩みに対して心から各位に謝意を表する。

本紙は大社四季折々の姿と神郡宗像の香りを厳せて編集し、一般神社界の社報とは異る宗像独特の形式を伝えることが出来、毎号出版数五千部を数えるに至った。

これはもとより当大社氏子崇敬者を初め宗像郡に関係する皆様方の心からなる深い御支援と御協賛によるものであり、紙上を通じて改めて厚く御礼を申し上げ、今後共末永く賞賜く御指導、御援助賜わらんことを切に御願い申上げる。

尚未筆乍ら創刊以来一貫して今日迄毎号欠さず印刷していただいた、宗像町田熊、大和印刷所の社長以下従業員各位にも深甚なる謝意を表し、今後共社報「宗像」が益々発展せんことを祈り結びとしたい。

ご挨拶

社報「宗像」は八月発刊をもって、第二百号を迎えることが出来ました。昭和三十六年一月一日付で第一号を発行以来、月刊誌として一号の欠号も無く、今日を迎えられましたのは、偏に皆様方よりの心からなる御支援、御鞭撻の賜ものと深く感謝致しております。

かえりみますれば、社報「宗像」が当大社の機関誌として、戦後の様々な混乱と悪条件のもと、九州神社界の内でも、逸速く創刊発行出来ましたのは、神郡宗像の総氏神として、先祖代々敬神崇拝の念厚き郡民氏子の皆様を始め故郷を遠く離れ第二の生活の場を得られている宗像出身者の方々の心の支えとして、当大社の四季の祭典行事、並に郡内各地の活動状況、種々の風俗伝承等を万分の一でも皆様方に伝達できたらとの考えのもとに、各地の宗像会関係者特別崇敬者、氏子会関係者、それに当大社に奉職する神職各位の強い願望と熱意、努力のもとに実現致したのであります。

社報「宗像」は又、当大社の今日の姿と表裏一体の関係でもあります。創刊第一号が発行された、昭和三十六年以降、当大社は、昔日の宗像大社を復興すべく、戦前からの「宗像大社復興期成会」組織強化を図り「昭和大御造営復興事業」に取り組み、昭和四十四年から五十年にわたり「昭和の大造営」を成し遂げたのであります。

この間、社報に於いては、これの事業計画、進行状況等を全国各地の崇敬者の方々に報告する重要な役割を果すと共に、一方では郡内各地の様子等も記載し当初よりの方針をも成し遂げてきました。

今後共、社報「宗像」は当大社のみの誌面ではなく崇敬者各位の心の糧となる社報にすべく誠心誠意努力を致す所存であります。各位におかれまして、より一層の御助言、御鞭撻を賜りますれば幸甚に存じます。

昭和五十二年八月十五日

社報「宗像」編集部

崇敬者各位

祝　社報「宗像」創刊二百号

出光

出光興産株式会社

本社　東京都千代田区丸の内3丁目1の1
TEL　(03) 213―3111（大代表）

御神徳の尊さ

出光佐三

このたび宗像大社々報「宗像」が発刊以来、二〇〇号を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

この間、昭和四十六年十一月十一日には、三千年に及んだ大社御復興の大事業が皇室よりの勅使御差遣を仰いで無事、御遷宮の大典を終え、更に五十年五月二十日には、第二宮、第三宮の遷座祭を行って、全ての造営事業を完了することができました。

今や宗像大社は、天照大神の御神勅の御精神に即られて、皇室御守護、国家鎮護に益々の御神徳を発揮されておられますことは、国民の一人として非常な感激を覚えている次第です。

私の一生をふりかえりますと、終始一貫、御神徳に浴してきたという一言につきます。宗像は昔から小学校の名校長、名教員を出すので有名でした。私の子供の頃は最も尊敬したのは小学校の先生でしたが、そういう立派な先生が宗像から出るのは御神徳のおかげであると聞かされて、子供心に人間の尊さを神様によって教えられたのです。後年、私が人間尊重とか人間が大事であるということを言うようになった基礎はそこにあります。

又、宗像の地方風も醇風美俗として有名であり、私の家庭もその影響をうけて仲の良い家庭で、そして一生懸命働いて自らは質素にして人のためにつくせという家風でした。それが現在私の会社の社風となっております。私が宗像に生まれ育って、御神徳の恵みを受けたから今日の私があると確信し、いつも感謝致しております。

この十数年来、私の講演の演題は必ず「日本人の世界的使命」にきめておりますが、これは一言で言えば、日本以外の国はモラルの民族であるのに対し、日本は道徳の民族であるということです。そしてモラルの外国は行き詰まっているので、お互という道徳のあり方を日本人が身を以て示して、世界の人々に平和と福祉のあり方を教えなければならない、そういう世界的使命を日本人はもっているということなんです。

その日本人の中でも、神郡宗像の宗像人はまた特別の使命をもっているのです。私の体験から言って、宗像の人は宗像大社の御神徳によって人間として立派であるということを断言できます。この宗像人が日本人を指導して、人間はかくあらねばならないということを教え、そして日本人が世界の人々にこうすれば平和、福祉になりますということを教えることになるのです。これが御神徳をうけた宗像人の責務であるということを、宗像の人々はしっかり頭に入れておいて頂きたいと思います。

社報「宗像」が宗像の中心である宗像大社から十数年にわたって発行されて、地元郡内はもとより、日本各地の宗像会の人々や、更に広く米国、ブラジル等に移住された宗像人にまで配布され、御神徳の尊さを教えられていることに、心から敬意を表すると同時に、今後一層の御努力をお願い致します。

以上

「宗像」二〇〇号発刊を祝す

宗像大社氏子会長　中村清之

去る昭和三十六年一月創刊号発行以来、十六年にして二〇〇号となり、年月の経過の速さに驚くと共に、此の間宗像大社の大発展を顧みると、真に祝福すべき時期であります。

宗像大社は天照大神の御子の三女神、田心姫神「沖津宮」湍津姫神「中津宮」市杵島姫神「辺津宮」の総称で、極めて尊い神であることは、旗に皆様方御承知の事ですが、宗像郡は全国に於て神郡と称せられる、七つの神郡の一つであります。

昭和十七年十一月「宗像神社復興期成会」が発足しましたれど、丁度大東亜戦争中でありまして、二十年八月十五日終戦により、二十二年五月三日、新憲法施行にて第二十条三項の「神道損令」に依って、国家の護持が廃止されて、自ら神社を維持することになり、復興期成会役員、崇敬者及び氏子と共に、敬神の熱意に依り、同四十三年、大造営計画が樹立せられ、四十六年十一月十一日、宗像大社遷宮遷座の儀が、厳かに行われ、五十年五月には、第二宮第三宮も完成し、造営前に比し、数倍の神域となり、往古の荘厳なる神社が再現されたのであります。

大社現在の本殿は、天正六年（一五七八）宗像大宮司氏貞公が造営せられ、拝殿は、筑前領主小早川隆景によって、天正十八年（一五九〇）に造営され何れも、重要文化財として指定されております。

又、昭和二十九年より四十六年迄、三次に及ぶ、沖津宮祭祀遺跡の学術調査に依り、五万数千点にのぼる御宝祭祀遺品を発見し、其の事は神社界として真に祝うべき事であります。茲に所感を述べて祝辞と致します。

右の如く由緒ある宗像大社を戴し我郡民は広大無辺の神徳を蒙り、昔から郡民は誠実にして、人格ある先輩名士を多数輩出致して居ります。之等の人達に続く我々郡民は現代の一部の誤りたる民主々義に惑わされることなく、堅実なる思想をもって、日本精神を堅持して、現代の教育の有り方を批判して、国を愛し、人を愛する国民となり、日本の発展を期して努力すべきだと考えます。

昭和四十年津市の神武地鎮祭主催は、同市の共産党の市会議員に依って、憲法違反として、津地方裁判所に告訴され、同裁判所では合憲の判決を受けたが、原告の上告の結果は、名古屋高裁に於て、違憲の判決を受けてから、最高裁に移って以来六ケ年、全国の神社界、宗教界は、如何なる結果になるかを見守っていた処、去る七月十三日、名古屋高裁の二審判決を破棄して「宗教上の儀式行事」として国家と宗教の関係を正しく判断して、合憲の判決を受けた事は神社界として、又日本の民族精神として真に祝うべき事であります。茲に所感を述べて祝辞と致します。

社報「宗像」二〇〇号発刊をお祝ひ申上ます

八幡宗像会長　真鍋良金

郷土を持つものの喜びと、常に温い郷土の香りにひたる者は幸福である。味う機会に恵まれる者は、郷土に感謝すべきである。

神郡宗像を古来より誇りとしてきた先祖、幾多の諸先輩、先覚者が宗像大社を中心として、自己の心の糧とし、又中心として生きて来て、我々現在人を育てて呉れた恩義を忘れてはならぬ。

幼な心に思い出す宗像誌の初刊より、亡父、故は亡安永叔父より語り聞かされた遠い過去の出来事が今更の如く思い出される。郷土史を繙けば、殆んど宗像誌の歩みと一致する。宗像誌の発行は時代の流れと共に発行元は変遷したが、宗像大社の社報へ統一されて三十八年十月に約一五〇名の同志が集って、結成、現在では約一〇〇名ですが、年に一回の総会と毎年十月一日の大祭に、バスで参拝するだけの行事が最大の行事と致しておりますが、精神的な日頃のつながりは、貴いものがあると信じます。

宗像郡の私どもの先輩は群賢輩から、早二〇〇号に達したとは。感慨無量です。故郷の宗像は宗像大社と共に生きて来た歴史を持つ。宗像人の生命の実相は、宗像三神を戴き胸懐として尽きる処がない。

僅か半世紀の間の宗像の変り方は、産業経済の異常と思われる発展に伴い、眼そば立てる程急変したが、宗像人の心の中には、永い歴史の歩みが深く刻まれている。我々は郷土を忘れ、忘却の彼方に追いやる事は出来ない。古いものを懐しく、かつ美しく思う懐古趣味にのみひたる者ではないが、生粋の宗像人が次第に少くなり、又真の神郡宗像を理解しない人が増加して次第に姿を変え、古来の宗像が壊わされて、発展と云う名のもとに自然の緑の山河が少くなり、破壊の度が一層深まるのであれば最少限度に昔の宗像を偲んで残す事に努力する義務があると信じる。

年一回の在郷宗像人が集いて宗像大社参拝を決行する事も、心温る意義ある行為と心嬉しく感ずる。歳月の流れと共に、今後一層の変遷を見るであろうが、後に続く者の為にも、我々現代人が心して昔の宗像の良さを守る為、心をくばる事は当然の行為と厳く信ずる。

宗像人と私達

戸畑宗像会長　竹内信夫

私共は宗像に生まれ、宗像に育ったことを最大の幸福に思い、宗像に郷土をもつことを、誇りに思っております。戸畑宗像会は大正時代に結成され、戦争によって中断されておりましたものを、昭和三十八年十月に約一五〇名の同志が集って、結成、現在では約一〇〇名ですが、年に一回の総会と毎年十月一日の大祭に、バスで参拝するだけの行事が最大の行事と致しておりますが、精神的な日頃のつながりは、貴いものがあると信じます。

宗像郡の私どもの先輩は群賢輩出数ゐるにいとまありませんが、中でも孝子の武丸の正助さん、教育界の釜瀬新平さん、軍人としての伊豆凡夫さん、入江仁六郎さん、出光万兵衛さん、事業界の入江海平さん、林繁蔵さん、倉田主税さん、安永渡平さん、出光佐三さん、医学界の武谷広さん、等々素朴にして誠実な宗像人気質の代表的人物だと思います。

私共はこの立派な人物のあとを受けながら誠実な人生に徹してゆきたいと思います。

御事歴を、一般人に分り易くもっと多く掲載していただければと思います。更にまた、宗像大神と宗像郡は離別し難たい因縁にあると思いますが、「新しい宗像」のあるべき姿、「今後の宗像」の進むべき道について、先導的、試行的な各階層の提言を紙面にもっと盛り込んでいただきたいと思います。

次に、聞く処によりますと、「宗像」は全国的に更に海外にも多数領布されているとのことですが、案外、郡内でその発行を知らない人が多いことは残念だと思います。もっと地元、郡内に広くゆき渡るようにされて、「新しい宗像」の主開的な場に立たれたら、「宗像」の意義も大きくなるのではないかと思います。

妄言多謝

社報「宗像」発刊二百号を祝す

大島村長　中村国美祢

「宗像」の発刊二〇〇号を祝して、茲に衷心より慶意を表します。

凡そ編輯の業たるや、至難の技法にして、本務の片手間には行ない難いものと思います。

それを十数年に亘り、一月の休みもなく今日まで続刊された、大社職員の苦労は並々のものでなかったと思います。それも職員の皆さんが、日夜、宗像大神の御徳の発揚を念願された至誠の発露によるものと思います。

今後一層の御献身により「神郡宗像」の本意を顕現される爵に、「宗像」の刊行をより高く、より広く、続けていたきたいと思います。

それにつきまして茲に二・三の提言があります。おこがましいことと思いますが、「宗像」のより良き進展の一端になれば幸甚だと思います。

先ず、「宗像大神」「宗像大社」の幾世紀に亘る数々の御神徳、

祝　社報「宗像」二百号

西日本相互銀行
福間支店
福間支店長　石松鷹威
電話　福間　②1231～1233番

福岡相互銀行
古賀支店
古賀支店長　川添義雄
電話　古賀　②3636～38番

福岡銀行
宗像支店
宗像支店長　江頭工
電話宗像⑥2017.2217.2721番

社報二百号に寄せて

白雲老士

昭和四十四年四月号が百号記念として話題になったことを覚えている。月刊誌は休む月を持たぬ。その後も大社職員の努力により、号を重ねて今ここに二百を積む記録的劃期に至ったのである。月刊誌「宗像大社々報二百号」を心から祝福したい。

宗教学術の団体組織が、何か教派の宣伝か寄付集めに機関誌めいたものを発する場合「三号どまり」という嘲笑の常套語が出る。事実、その発刊と消滅の例が、世間にあまりに多いので、常套語と折紙をつけても恥はかかぬ。創刊号と廃刊号を兼ねた三号どまりどころか一号どまりもある。

近頃の週刊誌やその同類には随分いかがわしい営利性を見る。金になれば売りさえすれば利潤追及は、嘘も非常識も一向にかまわない出版悪、それは別として、宗教学術の研究宣布を目的とする月刊週刊誌は、多くは営利に出ていないから、経済面の終始は大抵赤字ときまっている。

神道界だけを見ても、老骨は三号どまりの例を文字通りに認めないわけにはゆかぬ実例を知っている。編集費印刷費をはじめ郵送費は予算を喰う。編集費は多数の職員が、本務の傍らペンを執り郵送事務まで協力してゼロに等しいが、専門家または兼務でない職員が当る場合には、多額の人件費も計算に入る。他社がやっているから、当方もやる。どこも軽く片づけているのだから、当方もひまつぶし面白半分にやってみる。それが三号どまりの典型となろう。

宗像大社の社報「宗像」は昭和三十六年の創刊であるから、既に二十年に近い星霜を累ねてきたが、今なお極めて健実に進展して、毎月おなじみの読者の手に開封されている。これに不思議もなく、また声を大にして敢えて自慢の鼻を動かすこともあるまいが、職員の協力がなかったら、ここまで歩むのは至難であったであろう。

言うまでもなく、社報の目的は神徳の宣揚に本義がある。それは極めて重要なことで、むしろ社報の生命と云っても過言ではあるまい。それが大きく呼吸して二百号、職員は遠慮なく感想を吐いて喜び、種々の足跡も語られる。

葦津宮司の熱心な指導のもとに、最近恒本祢宜、山田権祢宜等の実直型職員の主務者も決定したと聞く。要は誰彼とか、向き不向きとかはない。神徳宣揚の本義に帰一する気持で精進されるよう祈りたい。それが社報の真価をますます高め、地味ながら大社事業の美しい花の一つとも数えられよう。

そしてやがての三百はおろか一万号が輝く日まで、協力勉励は続くに違いない。老骨はもう頭が古くなった。若い情熱あふれる人達と、漸次肩替りしつつも、なお分に応じた緑の下の力持ちは惜しまない心意気は残っている。

(編集部付記)
白雲老士氏は、当大社名誉宮司久保輝雄氏の雅号であります。

心を支える社として

宗像町長　天野敏樹

今も昔も宗像は、宗像大社を中心に動いているといっても過言ではない。政治、経済を動かした大宮司家の時代はもちろん、近世まで領民の生活を支えてきた。都市化が進んで現代でも人々の心にしっかりと根をおろしている。大社にまつわる地名、史話も数多く残存、大祭は文字通り郡民の祭りである。

神を敬う気高い郡民性は、多くの教育者や事業家を輩出した。しかしながら、神郡宗像の気質気風は、やもすると都市化の波にさらされ、薄れがちである。物から人への行政を指向する我々為政者が心のふれあいを求めてコミュニティづくりを進めているのも、豊かな郡民性、郡民性を守り育てることにほかならない。

「ローマは一日にして成らず」という諺がある。今日のこの宗像の発展、繁栄は先人の努力と幾千年の宗像の歴史の上に立っていることを我々は今一度考えるべきではなかろうか。

郷土愛なくして地方自治は発展しない。お互いが感謝の念と努力を惜しまないならば、より住み良い理想の都市ができると信ずる。

交通安全の守護神として西日本を初め全国に名を馳せている同大社であるが、郡民としては今後とも心を支える柱であることに違いはない。

郡民とともに歩み、ともに発展する大社たることを願ってやまない。

宗像誌発刊 二〇〇号によせて

玄海町長　高橋半三

私共の郷土誌として親しまれている「宗像誌」が創刊二〇〇号を迎えた。

宗像誌は郡町村会にて編輯の時代もあったが、宗像大社に引継がれて、既に二〇〇号となったのである。宗像誌は宗像大社を中心に宗像郡ゆかりの人達の情報交換、各種団体の活動状況、宗像史実の探究、文芸愛好家による歌会行事等多彩な編輯である。

その時代の出来事を後世に伝えると言うことは、その時代の人の務であり、事実を伝えると言うことは責任を持つことにも繋がる。宗像大社が、宗像の地に鎮座ましましてより三千年の星霜を経ている。吾等宗像族は大神を中心に心身の修養に努め、一家の和合を図り近隣との融和に尽して良き伝統を定着して来た。

宗像大神を心のささえとして繁栄して来た私達、其の私達の姿が今日宗像誌により後世に伝えられようとしている。そこに宗像誌が宗像大社中心に編輯される大いなる意義を感ずる。

発刊二〇〇号を記念して、此のよき宗像に住める幸福を改めて考え、私達の宗像誌が宗像大社三女神の御加護を受けて幾久しく栄えることを祈ってやまない。

〝宗像はひとつ〟

福間町長　的場重郎

社報「宗像」が今月で、ちょうど二百号発刊の輝かしい壮挙を迎えるに至りましたことは、まことに同慶に堪えません。以来、十六年余の長きにわたり「宗像」とともに歩み、育ててこられた関係の方々の一労苦に対し、心から敬意を表します。

「神郡宗像」とか「教育郡宗像」といった宗像を代表する別の呼称は、それを裏付けるように古くから、この地方に宗像大社を中心とする生活圏が熟成し、固有のものとして徐々に輪をひろげ、やがて連帯した社会構造を形成して来た歴史的背景をみても明らかです。

つまり、大社中心の神格化思想が、往時の社会生活の基調であり、唯一の心の支えであった訳です。こうしたこの地方独特な土壌に根づいた気風は、やがて宗像の特質として郡民の誇りとさえされ、後世に宗像の美風を語るに足る十分な〝礎〟にまでなりました。

ともあれ人間集団で生活を営み、共同・協調の中で、それなりの社会秩序を確立するための必須要件は、同じ目的のために結ばれる人の和であることは、今さら申すまでもありません。

(特に都市化現象の著しいこの地方で、殊更要求される人との融合や連帯は、この地域が発展途上であるという特性があるだけにより望まれるべきでしょう。)

〝宗像はひとつ〟という理念は、以前から郡内各町村の行財政上の基本で、相互協調と信頼の精神は早くから施策にも具現され、組合立の し尿、じん芥処理場建設や高校設置の経過をみても明らかです。又最近では消防組合の設立、さらに水道企業団の発足など一連の共同処理化が進む現状は、とりも直さず〝郡連帯〟の感を一層強くします。とりわけ、最近話題となった農協合併は、単なる組織や事務の合理化だけを意図したものではなく、将来の宗像のあるべき姿を示唆し、方向づけたところに大きな意義があり、評価されるべきものだと確信いたします。

しかし、反面では、「し尿処理場移転改築」をめぐる住民反対運動が俄かに実鋭化し、この地域で大きな社会問題としてクローズアップされてきたのも見逃すことのできない事実であります。正に現代の世相を反映したひとつのエポックといえましょう。いうまでもなく解決への道は、理屈抜きで〝宗像はひとつ〟の理念に徹することだと考えます。

宗像のより良き繁栄を願い、この地域に残る美風と伝統を守り育てるため、今一度、融和と調和の絆を強め、〝ふるさと〟への連帯を郡民こぞって深める必要があるのではないでしょうか。そのための先鞭として又、福間町の首長として、先人が築いた素晴らしい遺業と郷土の誇りを継承し、明日の宗像発展のため、他の町村長と力を合わせ、私に負託された使命と責任を果すべく、持てる力を惜みなくこれに傾注する所存であります。

おわりに、社報「宗像」の二百号刊行の偉業を心からよろこび申し上げるとともに、今後益々のご発展を祈念いたします。

宗像大社への追憶

津屋崎町長　赤間誠

昨年であったか、本町が発行している「広報つやざき」に本町出身で千葉県に住む中村恒男氏(KK千葉測器社長)の随想が掲載された。「幼い日の想い出」と題し、なかには、幼い日の田島放生会の想い出や、昔の釣川の情景などがとくとくと綴られており、私も、一瞬、童心にもどり、快い気分にひたることができた。

そして、中村氏は最後にこう書いている。

「毎年、浸珠少華が真紅に燃える頃になると放生会に帰ってみるかと思いながらも永いこと果せないでいる。異郷での郷愁である。もう私も七十歳になる。」

異郷にあってのふるさとの想いはひとしおのようだ。特に郷愁をそそるのは、神社のおまつり。境内に響き渡る笛の音はなんともいえないものがある。

一時、守銭奴になりさがった日本人も、最近は目覚め、ふるさとを見直すようになってきているようだ。

私、今期で三期目、町の総合計画の改訂を手がけており、心豊かな、住んでよかったと思われる町づくりへ力を注ぎ、よきふるさとを町民とともに、築いていきたいと努力しているところである。

最後に、郷土のニュース紙「宗像」が遠く郷土を離れた人々に大いに読まれ、郷土と異郷を結ぶコミュニケーション誌として、ますます発展していくことを期待するものである。

祝　社報「宗像」二百号

(有)大和印刷所

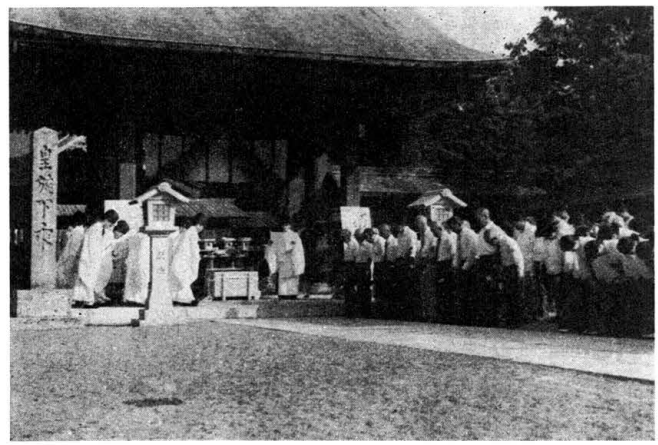
福岡県宗像郡宗像町大字田熊

TEL (09403) ⑥2027(代)

―猛暑の中―
大祓式・夏越祭斎行

当宗社恒例の夏越神事は、七月三十一日午後五時、真夏日の夕陽直刺す本殿神門前にて、古儀に則り厳かに斎行された。

当日、定刻、葦津宮司以下神職、巫子、職員、氏子総代、篤信者等約百名の参列者は斎館前に列一立、神門前に設けられた大茅輪に向かい、宮司の祓詞に続き、一同、一礼の後、大茅輪の周囲を時計の針の逆廻りに三回廻り、茅の輪をくぐり抜け、人形に自分の罪穢を移し、人形を川に流し、清められた。



この大茅輪は、直径約四米にも及ぶもの宗田島地区の総代、又地元協力会の人等の手によって、年々減少していく茅を苦労して刈り集め、丹精こめて奉製されたもので、この茅輪を潜る事によって、邪気を祓い心身爽快になり、暑気にめげず精気よみがえるものとされている。

大祓式は、先づ係神官より神職参列者全員に、切麻の紙包が配布され、次いで、宮司より大祓式を執行う旨宣せられた。この大祓式の宣言は、古く祭時代より、神祇官の命令により全国の神社の宮司が朝廷の名代となり日本国中隈なく災禍がないように行った由来によるもので、千数年の歴史と伝統に基づくものである。

次に宇都宮祢宜が被主となり大祓詞を宣読、更に先に配布された切麻で身体を祓い、次に被物の白布が順次廻され、各々息吹して布を切裂き心身の穢を祓物に托した。

終って宮司以下古歌を斉唱して大茅輪を潜った。初回「みなづきの夏越祓する人は千歳の生命のぶというなり」と唱えて左に廻り、次に、「思い事みなつきねとて麻の葉を切りに切りても祓ひつるかな」と右廻りに潜り、最後に「宮川の清き流れにみそぎせば祈れる事の叶はぬはなし」と再び左廻りに潜り、夏越の大祓は滞りなく終了した。

又、全国各地より送付された人形も厳粛に祓物がなされ、古儀に則り釣川河口より祓物と共に遠く玄界洋上に流棄された。

引続き、御本殿にて夏越祭の合奏の下、盛沢山の海山川野の幸が次々に献供され、葦津宮司の祝詞が奏上された。

かくして、国家皇室の繁栄と安泰と氏子崇敬者、又入形に寄せて祈願を申込まれた崇信者の方々の健康と交通安全、業務繁栄を祈念する夏越の神事は滞りなく終了した。

◇

【御礼】

当社恒例の夏越祭神事に当りましては、郡内氏子各位並に全国崇敬者の皆様より多数の人形をお寄せ戴き、お蔭を持りまして祭典は天候にも恵まれ滞りなく盛大裡に斎行致すことが出来ました。

ここに誌上をもちまして謹んで御礼申し上げます。

昭和五十二年八月盛夏

宗像大社社務所

崇敬者各位

◇九・十月祭典案内

※辺津宮

九月一日・十五日　月次祭　午前十一時

九月一日　風鎮祭　午前十一時三十分

かさじつめのまつり。稲の結実の時期にあたり、台風等の風雨の災害を被ることなく、順調に実るように神の加護を祈願する祭り。

九月二十四日　秋分祭（皇霊殿遥拝式）　午前十時

春分祭に対して斎行され、春分祭、秋祭とあわせて、我国で三度の祖霊をまつる大事な儀式となっている。

九月三十日　辺津宮出御祭　午前十時

本殿にて出御祭斎行し、神湊の頓宮へ出御される。御神鏡は神湊街の人口から湊の人々の奉仕する輦台に奉安されて頓宮まで神幸し、頓宮に一夜奉安され、沖津宮、中津宮の御神鏡を出迎えられる。

九月三十日　織幡神社秋祭　午後七時

玄海町鎮崎に鎮座される旧摂社織幡神社の秋祭り。

十月一日　至三日　秋季大祭

俗に宗像放生会とも言われており、一日早朝、沖・中両宮の神様を大島から神湊まで、御座船にお載せし、海上十一キロを漁船数百隻が大漁旗を翻しながらお供し、巡航渡御する。神湊頓宮には津宮の神様がお出迎えになられ、神湊頓宮で三神お揃いの上辺津宮まで神幸され、辺津宮では、三神をお迎えして秋季大祭が斎行される。大祭の期間中には、地元青年団奉仕による風俗舞を始め、浦安舞、翁舞が奉納され、又神賑行事として、伝統の流鏑馬の奉納や相撲大会が開かれる。境内には多数の露店が軒を並べ、大祭に彩どりを加える。

十月十二日　的原神社祭

宗像町八並に鎮座される旧摂社的原神社秋祭り。

十月十五日　月次祭　午前十一時

十月十七日　献茶祭　午前十時

※中津宮

九月一日・十五日

十月一日・十五日　月次祭

十月二十六日・二十七日　沖・中両宮秋季大祭

※沖津宮

九月中旬　沖津宮神幽迎え

◇七月　社務日誌◇

一日　月次祭　午前十時

神湊水神祭並魂供養祭午前十時

出光福岡支店評議支店長参拝

三井建設グループ五十名参拝

田島校区高砂会百二十名参拝

臼杵運送（株）宗像神社月次祭

（株）山本商店二十名参拝

八幡製鉄ヒルデング（株）二十五名参拝

西鉄赤間営輪会二十三名参拝

五日　郷土芸能振興会理事会於斎館

浦安舞講習会於斎館多静子講師

六日　氏子評議員会午前十一時於斎館

九日　庭園剪定奉仕義部会十三名

十三日　短歌大会委員会並五選会於斎館

木村福岡高検事務局長参拝

十五日　月次祭　午前十時

末社祇園祭斎行

十八日　清風瓶華家元早川尚洞献花

二十一日　中津宮七夕揮毫会

二十三日　皇学館大学真弓忠常助教授参拝

二十五日　対宮地い神社ソフトボール親善試合於町営グラウンド

二十六日　郡新任教員研修会於斎館

三十日　洞海十木四十名参拝

三十一日　大祓式並夏越祭　午後五時

論説　波に祈る

初夏の風薫る玄洋、ご機嫌よし。春の海ひねもすのたりのたりかな、悠々ゆるやかなうねりを揺つて、ご機嫌のよい玄洋の表情である。波瀾万丈、人間界の紆余曲折おだやかでない表現によく使われるが、島も通わぬ玄洋灘の暴風の目に当ってはまる。

島も通わぬどころではない。怒濤巌を咬んでは、沖ノ島周辺は人も鳥も寄せつけない。灯台も無人化した今日、この島は奉仕の大社職員一名が総人口だが、冬季は十日目の勤務交代も思うに任せない。二週間を過きて携行食糧が底をついては非常手段、ヘリコプターが翔ける。神職の勤務交代にヘリが出動する例は他にあるまい。

数千年来この神島では、厳粛な祭祀が営まれた。海は荒れても奉仕は欠かせない。波に祈る。人間は大自然の猛威の中に無力ながら、恐懼の信仰は真摯に生き続けているのである。

波に祈る。国家の安泰のために、民族の幸福のために、社会の繁栄のために波に祈ってきた。荒天のためだけでない。史上何度か一国の命運を占う特別の事態が発生している。有名な二三の場合を焦点にすると、記録以前の出来事は霊上の神話として触れないが、蒙古襲来、日本海々戦、今次大戦争末期の沖縄全滅が取り上げられる。この外には海外からの大がかりの所謂難はなかった。

蒙古の大軍が玄海を制圧して博多湾に押し寄せた事件、元寇とも呼ぶ国家興亡の危局であった。箱崎宮楼門に仰ぐ敵国降服は、敵国は降服すべしの祈りの大文字であった。神風が吹いた。敵軍は瓦滅した。

バルチック艦隊を日本海に邀えて、東郷司令官見断の工字戦法が奏功した。哨艦信濃の敵艦発見は偉勲であったが、彼より先に発見した数名の漁民は通報のため苦闘している。和船の機動力の大差は、徒労に終ったかの感はあるものの、波に祈って澄いた愛国心は美しい。民族精神の精華は名誉を超えて生きている。

真珠湾攻撃に火蓋を切った太平洋戦争は。緒戦の成果に幸先よい夢を抱いた。戦線の拡大、物量の消耗、攻防の規模が予想外に延びて、遂に本土決戦の最終段階に至った。古い言葉を借れば、城名状に二億総討死の覚悟を迫られたのであるが、痛ましくも最初の惨劇「沖縄全滅」が国民の目前を横矢させ、ポツダム宣言受諾、無条件降服、いかに号泣しても今度は敵国に降服せよの命令に従う外はなかった。

波に祈っても、神風は吹かなかった。そのため沖縄は完全に制圧され、犠牲十八万八千。それには多くの非戦闘員、可憐な女学生集団も含まれている。彼等が追いつめられた摩文仁の岳は、また拾われぬ遺骨の放棄少からずと聴く。ここに今日若い人達が見物に来るが、呂魂ではなくて観光遊覧である。

悲劇の島は観光資源に事欠かない。施設を整えて遊覧客を待つ。これが住民の大切な生活手段であれば仕方がない。又楽しく遊ぶ若い遠来の客にも敗戦の責任はない。何の罪もない。

沖縄に限らず、忍び難きを忍んだ国民は、月日と共に祖国のためにも同胞のためにも言わなくなった。敗国の同情を待ち望んで、その物資配給に頼って衣食にありついた。寒気や飢餓を忍んだ。当時敗戦と言わず終戦と言い、飢死と呼ばず栄養失調と呼んだが、卑怯な表現と指摘する敵兵もあった。既に誰もが波に祈らなかった。

この頃「岸壁の母」と題する流行歌を聞く。異国の山野に出征した愛児の無事の帰還を、母は岸壁に立って待ちわびる切なる情感がこめられている。もはや出征愛国ではない、大切な生命、肉身の愛情である。今日では波に祈る人はいなくなったのか、岸壁の母は見られなくなったのか。いや、岸壁に母は立っている、波に祈る人は続いている。

わが国のように、四周を海に囲まれた海洋民族にとっては、国民の日常生活から国家の興亡に関する大事件まで、波との関係は極めて深い。絶えず海洋気象の影響を受ける水産や運輸事業は、政治的にも社会的にもゆるがせにできない重要性を持っている。従って波に祈る歴史的意義も生きているのである。

海洋民族は、戦争に関係なく複雑な国際事情に対して、国家の繁栄のために風波の悪運のために、波に祈らねばならない。

（白雲）

阿蒙少言

毎年のこと、八月になるとお盆と共に巡りくる敗戦記念日。戦後生れの国民が総人口の半数を越える今日、今どき「億総ざんげなど笑い草だろう。●「この村にも敵の兵隊がやってくる。言葉が判らぬのが先す心配」と、占領軍を迎える前の石佐左佐の風景が思い出される「何を言われてもノーで通せ」が教えられた。稍々神妙的なノーの一点張りも、迎撃準備の一つだった。●米が物珍しげな顔で漁民に話しかけるチンプンカンプン通ずる筈がない。チンプンカンプン通ずる筈がない。台所まで徘徊する。火吹竹を取りあげて用途を聞いた。老婆の返事「私はノーでございます」●日本進駐記念に火吹竹を持っていった。勿論何が しかの金を置いて、笑いながらの動作は珍妙に見えたが、見送る老婆は使いふるしの汚い火吹竹が貰われて嬉然。恐れていた略奪や乱暴など微塵もない紳士の米兵に、こちらの希等感が強くなった●何年か前に出陣を見送った愛児は、戦死か生存か、どこで武装解除か捕虜か。食べ物、殊に甘味に飢えている子供達は、チューインガムをねだる熱米兵のあとを追って走る。惨めな光景をつけたしを見た●帰還兵の話に聞く日本軍戦地の惨状は、勝利者米兵の紳士ぶりに比べお粗末に過ぎる。徴発の名にかこつて放火破壊、武士道厳正の旗印たる日の丸がさきだしそうな戦犯の数々に、正義は存在しなかった●さて、敗戦国で金を払って火吹竹を買い、飢えた住民に食糧を配給してくれる米兵様「神や仏」と国より キリスト国の方が秀れているとの感を強くした」とは、当時の思い出話に含まれていた●ノー族の孫達は今日「ノーでございます」とはいはない。OK族に変って英語を放ちダンスもやる。だが然し、日の丸を仰いで正義感や愛国心は如何。

（白雲）

第一九三回　宗像大社歌会詠草

毎月一日／切　詠草到着順

田島　吉武　武雄

這松の緑は濃く雪に映えプナの並木路車は走る美女平へ

田熊　力丸　一郎

暑れゆく町のすがたに呼応して早くも出て来た型スーパー

深田　中野　節子

雨の湖を突窓の下備へおくバケツに梅雨の日の光差しぬ

福岡　吉田　信夫

晴れし朝屋上に来て体操す吸いこむ如き空の青さよ

津屋崎　谷口　礼子

紫のドレスにあいし指踊る嶮々のリズム五月蝿なるに

武丸　原田　リノ

雨ふりてひと寝りせし老ひ夫が時をたがへて朝かと言へり

田熊　鷲津かつ代

にわか雨たちまち過ぎて土の香の苦しきまでに暑くたちくる

香椎　桜井　ツ子

旅に出て心弾みた購ひし貝の風鈴が軒に鳴るかな

福岡東　吉村　三郎

参道に蕪翔ぶる夏の朝素草や地を這い霧に消えゆく

津屋崎　浜津　鴻浪

朝顔の蕾放射し伸びてゆく朝な夕なの風にはためき

東郷　藤崎　辰子

赤きいろに塗られし杭の打たれたるやがてはダムの底になる道

津丸　藤田　肇

沈む陽を此の丘に来て見つめ居き国敗れたるあの日忘れず

田熊　吉田　直志

梅雨はれの朝の草道さわやかに早苗をかすめつばくらめ翔ぶ

戸畑　田中　ハツセ

手をたたき思はず声を出してをり日ソバレーの試合終るまで

名古屋　野崎　傳三

大比叡を枕にした夕沒り陽の光の中へ鳥帰りゆく

武丸　原田まつ代

水道の朝水ぬるる鶴子越しの庭木の若葉露玉宿す

宮田　北原　君子

夜苗取り親子もつみえ農をせしこと想ひをり五月雨降るタ

原町　八波　五月

ウインドーの造花の如く色あせて紫陽花の要を我は愛しむ

曲　天野トモエ

片付けてパンチカーペット床にはり一間廻下を応接間となす

徳重　石松や寿子

補強せし土塀崩れて支正の俤一つ又消え失せぬ

田久　立花　勇雄

午睡より覚むればいつしか風立ちて林の風鈴しきりに鳴れり

田久　小方　実

腰痛の都度揉みくし妻はあらず風にたてて夜のからだ温む

東郷　田中　春子

結局は平凡に暮らん寝ねながら明るる障子の桟数えおり

大井　吉田ますみ

夏を病みて寝がたき夜の続きけり朝鶏の声聞きつまどろむ

田島　楠　理

夏の夜に十五日の月映えて影をおとせし義経の松に

武丸　立石ろせ乃

不日出に堪えつつながく病みたりし姑の三十三回忌令日は

宮田　片山　朔子

真日の下鮮かに咲く夾竹桃清しと見る重窓につづくを

津丸　松尾　豊

おほはしく見し機械植えの早苗田が土用の日差しに忽ち生い立つ

玄海　永富　臻

彼岸会の寺に集へる人の手を離れし童女は手つまづる

田熊　今村　重刀

除草剤の重き撒布機背に負ひて真昼撒きゆくぬかる稲田に

津屋崎　占部　由久

強き太陽の光りにおちず高々とほこりがに咲く向日葵の花

武丸　立石　昇

いづこにて巣立てならん燕五羽白き腹見せ電線に竝ぶ

福間　広渡一寸毛

花咲かぬハツ手の葉縁ち水玉のならびて光る雨上りの朝

玄海　白木うめの

グランドの防球網に干されたる野球着男子の匂ひに乾く

第二十二回 中津宮七夕揮毫会
盛会裡に終了す

当社恒例の中津宮七夕揮毫会は去る七月二十一日、盛会裡に終了した。本会は今年で二十二回目を数え、今ですっかり当地方の小中学生に馴染みの深い夏の行事として親しまれている。今年からは予選審査を止め、希望者全員の参加を認めたが、付添いの父兄を含めて約千名近くの人々が、朝早くから二隻の共天丸に分乗して大島に渡った。当日は全く海上平穏、夏休みを迎えて晴々とした子供達の笑顔が続々と島の波止場に降り立った。

午前八時より大島小学校、中学校の二所で席上揮毫開始。手渡された二枚の用紙に日頃の練習の成果を懸命に書き上げる、廊下には出来栄えを案ずる心配そうな父兄の顔が並ぶ。三枚のうち一番自信作を持って中津宮に参拝、受付に提出した後の審査を待つ。

午後一時から照海殿前の海岸で"ささえ採り"が催されたが、習字から解放された子供達は、元気一杯水に飛び込み、嬉々として真夏の海に遊び戯れた。

この間に中津宮社務所では福岡書道会の坂口雅風、城戸筑山両先生により作品審査が行われたが、上位部門は何れらぬ力作ぞろいで、最終選定は真重に行われた。

午後四時全審査を終え、金賞以上の作品を社前に展示し、拝殿に於て審査員の講評に続き表彰式が行われたが、美事受賞の栄冠に輝いた晴れがましい面持ちの子供達に惜しみない拍手が送られた。

◇

入賞者は次のとおり（金賞以上）

最優秀賞

神興小四年　森　明子
西南学院中三年　秦　浩起

小学校の部

一年
特選、中道けんじ（津屋崎）、安井智子（東郷）
準特選、久保洋子（自由ケ丘）、高山智宏（福間）、こうやけい子（赤間）
金賞、篠原泰久（玄海）、はやしさとし（赤間）、佐藤みえ子（赤間）、神崎夕子（自田ケ丘）、中村まさひろ（赤間）

二年
特選、山岸明（河東）、中村けんじ（赤間）、笠井美香（東郷）
準特選、山本公子（赤間）、柴田千草（神興）、古里美恵子（河東）、森学治（神興）、西田けい（赤間）
金賞、太田大貴（玄海）、佐々木徹（自田西）、百武弘子（津屋崎）、西野操（津屋崎）、神谷まさひこ（赤間）、立部祐子（玄海）

三年
特選、塚本裕司（津屋崎）、中野仁美（玄海）、吉武啓道（南郷）
準特選、加藤知英子（自田ケ丘）、力丸哲也（玄海）、執行由佳（赤間）、永島明（東郷）、牛草綾乃（自田西）
金賞、石津靖夫（津屋崎）、水下博美（津屋崎）、林田武世（玄海）、中野桂（玄海）、伊藤敦子（自田西）、吉武律子（東郷）

四年
特選、立部敦士（玄海）、森明子（神興）、滝口優子（玄海）
準特選、片山圭子（南郷）、力丸真美（玄海）、高田昇（福間）、石津智（津屋崎）、宮石真由美（粕屋南）
金賞、古里道代（河東）、花田憲彦（玄海）、中野剛（玄海）、井上雅義（玄海）、井の口常子（津屋崎）、川崎智（津屋崎）、松本きく子（上野北）

五年
特選、原康（大利）、遠藤恭子（河東）
準特選、松尾美保子（赤間）、萩尾昇重（赤間）、中山朗（勝浦）、平田郁子（上島）
金賞、浜千草（津屋崎）、松尾由美（赤間）、山本与子（赤間）、伊藤晶（自田ケ丘）、本村千秋（自田ケ丘）

六年
特選、熊谷俊広（東郷）、永嶋聡志（赤間）
準特選、金谷理夏（自由ケ丘）、常軒利恵子（津屋崎）、山口俊子（津屋崎）
金賞、高畑由美子（自由ケ丘）、加藤幸枝（自由ケ丘）、荒木智美（津屋崎）

中学校の部

一年
特選、高田修（福間）
準特選、石津啓子（津屋崎）、中牟田哲哉（大島）
金賞、深田理江（玄海）、秦克伸（西南学院）、松本英一（大野）

二年
特選、橋田秀幸（津屋崎）
準特選、板矢由起（大島）、安井元昭（中央）
金賞、中島勝巳（三笠）、小畑由美（岡垣）

三年
特選、秦浩起（西南学院）
準特選、川原美恵（中央）
金賞、佐藤千鶴（大島）、遠藤雅恵（中央）、石松和徳（城山）

頭つき車えび

上昇また上昇のうなぎ登りの物価も、実情はお役所発表の数字とは大きな違いで、庶民の生活は苦しい。統計資料から数字を出しておけば役人の仕事は済む。売買の実情とんちんかに喰い違っていても、これは汚職にならない。平気の平左である。

商人の商魂は、物価上昇は困るとこぼしながらも巧みに値動きに便乗して、腕前の非凡をひそかに誇る連中もいる。売っんかなの意欲は、客引き広告に種々の智慧をしぼる。かつて極彩色の派手な広告が毎日のように新聞紙に折り込まれて、各家庭の購買心をあおる。デパート商店の販売合戦も激化して広告費も安くはなかろうが、これは当気、その広告の品物を買う者が負担してくれる。

異様な記い文句が目についた「頭の付いた車えび入荷」とはいささか変だが、これが主婦の気を引く。マーケットに列ぶ車えびに頭のないのが今日の通例、メキシコ印度などからきたもので、江戸前の看板あげた鮨屋の握りに使われては、江戸前がわからなくなる。

残筆しがらみ草紙 (8)
玄陽隠士

海産物の頭つきは、大いに宣伝価値があろう。謝恩大廉売を大げさに書いたのは、決して安くない。

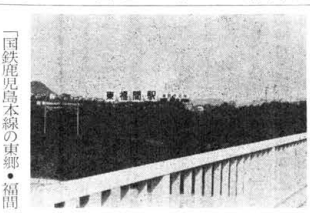
二百海里とか十二海里とか騒しくなったのも、自動車や牛豚肉の取引を漁業資源に結びつけた国際経済の裏面事情もからむ。多数の旦章旗がアフリカ南米の近海まで進出しては、日本の工業製品に巨費を払って陸上げする異国の丘の住民も黙ってはおれまい。

運搬に日数を要し鮮度は落ちても、蒲鉾材料には差支えない。日本近海ではあまり獲れないスケソウダラは蒲鉾の主役だが、これが経済水域に妨げられて主役の座を降りるとなると、蒲鉾好きな国民の食生活は空前の異変を見ることになる。

そこで近海漁獲の王座にある鯛鰯の登場が考えられる。油気の多いこの問者は、蒲鉾には不適か、従来使っていないのでスケソウダラと簡単に交代とはゆかぬ。今後の加工調製には研究機関の努力が積まれねばなるまい。

恵比須さんも鯛を抱いてエビス顔の上機嫌、浦安の国の水産保護物に跨きて思案の末、鯛のホネの肉ばかりを集めて蒲鉾を作れと使用人に命じた。大きな鯛でもホネの肉の量は僅少、まさにこの蒲鉾は珍味中の珍味だったか知れないが、贅沢もまた極まる沈太と言わねばなるまい。やはり節句知らず

〝国鉄『東福間駅（仮称）』設置決定・今秋着工さる!!
―十四年の悲願いよ〳〵実現―



「国鉄鹿児島本線の東郷・福間駅間にもう一つ駅が欲しい。」、東福間団地、若木台団地を中心に周辺住民の十四年の長い歳月をかけた駅舎設置の悲願もいよ〳〵実現の運びとなった。

去る七月五日、国鉄本社に於て建設認可の方針が決定、今秋には「東福間駅（仮称）」の建設工事着工に入り、来年の秋には新駅の開業が確実となった。

新駅は福間駅から東方に二・七㎞東郷駅から西方に三・七㎞のところに総工費約四億円を分け建設される。駅舎は橋上形式をとり東福間団地、若木台団地両側より利用でき、将来は十二両編成の電車が停車できる上下三本（全長二四十m、幅四m）のホームを設置する予定である。

東福間駅の建設は、昭和三十七年に福岡県住宅供給公社が福間町と宗像町の境界である日焼の福間駅間道三号線の石垣の山林原野を切り開き、東福間団地を開発して以来、年々周辺部に木の団地が造成され、五十年には反対側福間団地、若木台団地両側に東急不動産の若木台団地が開発された。現在では東福間団地約一千五百戸・五千三百人、若木台団地約四百戸・一千五百人とより神興校区全体では約四千戸・一万五千人の住民がいる。将来は六千戸・二万五千人の人口になると予想されている。

住民の大多数は北九州市、福岡市への通勤者とその家族である。現在では唯一の交通機関である西鉄バスの東福間バス停より福間、東郷両駅へ出て通勤通学をしている。朝夕のラッシュ時には同バス停は想像を絶する長蛇の列が出きる。一方ではマイカーによる両駅までの通勤もあるが駐車場に限度があり確保に無駄な労力と出費を強いられている、為に地元住民より新駅設置の要望が年々高まり、国鉄に対してはもとより町、県、国等の関係官庁に対し強力に働きかけて来た結果、長い間の夢の実現を見るに至ったのである。

この新駅の実現により神興地区の地域開発は一段と進み、福間町はもとより郡内でも有数の居住地区として今後益々の発展と共に同駅を含め郡内には赤間・東郷・東福間・福間の国鉄四駅が二〜三㎞間隔で設置され、この四駅を中心に森林都市・日の里・東福間・若木台・製鉄福間地をはじめ大小の民間団地があり郡内人口（約十万人）の過半数を占める一大住居ベルト地帯を構成し、県内一の生活住居地域として、福岡・北九州両市の衛星都市型生活圏として飛躍が期待される。

◇飲酒運転追放キャンペーン◇
宗像青年会議所
―村山田（旧三号線）に於いて実施―

猛暑の去る、八月二日午前十時より、宗像青年会議所（理事長、片山一美氏）広報委員会（吉野委員長以下委員四名）主催による「飲酒運転追放キャンペーン」が、宗像町白水峠の旧国道三号線に於いて実施された。

当日は、当大社から神職二名、巫女二名。宗像警察署より警察官三名、巡視員一名、青年会議所より会員二十余名奉仕、同所に於いて、当大社交通安全守札・ステッカーを各五〇〇体。飲酒運転追放ステッカー二〇〇枚、オシボリ、キャンディ等を準備し、警察官の誘導により次々に停車する車輌運転者、同乗者に対し趣意を説明し援与を行った。

運転者は、最初は取締を行っていると思うのか、一瞬、緊張し、次にはホッとした表情を見せ、我々が説明すると苦笑をする運転者もおり、中には免許証を出したり守札を手渡すと金を出したり、説明よりも断りの方に時間を費いやすことが多く、又、逆にガンバレよと激励されたりして、和気合々の内に正午近くには用意していた援与品も無くなり有意義に終了したのである。

今度のキャンペーンは宗像青年会議所に於いて、各委員会毎に一案の郡民に対する啓蒙活動を行うという方針のもとに、広報委員会が企画したものである。統計によると県内でも宗像は有数の飲酒地区である。同委員会はこの点に着目し、「交通輪禍から郡民を守ろう」という趣意のもと、郡民の守護を司る、宗像大社と宗像警察署に協賛を依頼し、創立以来始めての交通安全キャンペーンを行ったのである。

交通安全の守護神であり、郡民総氏神でもある宗像大社としても今度のキャンペーンに感謝すると共に、宗像青年会議所の「郡民への奉仕」の精神のもと益々健闘発展されますようお祈り申し上げます。

わが国は急速に欧化した。戦後三十余年、国民の思想は現代主義への傾斜益々強まり、食生活も服装もここ数年で一変した観がある。欧化に圧倒されて、すたれるもの亡びるものもあろうだが、ふと古風な日本色の食べ物が振り起され再現でもしたら、パリ娘が沢庵を噛りながら銀座を行く。握り飯と梅ぼしが国際航空機でケつかれる。現代主義は常識の予想外に飛躍しがちである。

然し、衣食住みな気候風土に適応して発達してきた長い伝統がある以上、味噌汁さし身いかの塩辛など、どこかで生き続けるだろう。栄耀に餅の皮の類は滅びても、米穀が減産を強いられては瑞穂国の名も寂しい。居候が二杯目をそっと出す米飯主役の和食は失いたくない。

衣食住の欧化急進はともあれ、近時最も吾人の心を打つものは精神の欧米人化である。戦後教育が日本人を欧米人化して、一言にすれば日本人を骨抜きに駄目にしたとする人も少くない。戦後発生した病根と呼ぶ向きもある。欧化に圧倒されて、すたれるものと片付けておけぬ増加問題はしばしば聞く。民主教育を眼目とする学校と家庭から、昔存在しなかった多くの非行と悪質が指摘されては、教師父母の側に先に病根が根をおろしていることを知らねばならない。

頭つきの車えび、江戸前の心を持たない外国産のえびでごまかしてはならない。国家を駄目にしない民族的自覚が救いである。

人売春万引、小学校卒業程度なみの高校生の学力、一部の校舎なども暴力団なみの小中学生の乱社殺

『お知らせ』
「海の正倉院」放映さる
―八月二十八日午前九時三十分―

当大社「沖ノ島」は古代祭祀遺跡・遺品の宝庫として「海の正倉院」と呼ばれ数多くの国宝・神宝類が発掘・発見されております。

来る八月二十八日午前九時三十分より、九州民放合同制作番組の「新九州再発見」に於て、「海の正倉院」―沖ノ島―が放映されることになりましたので、是非視聴されますよう御案内申上げます。

◆放送局名
長崎放送・熊本放送・南日本放送・宮崎放送・大分放送・RKB放送以上局

「休稿」

各位に愛読いただいておりますが、連載小説「神楽」（うつのみなと）」・連載寄稿文「浜の寄物（はまのよりもの）」を本月号は二百号特集号につき休稿させていただきます九月号より記載致しますので宣しくご了承願います。

社報「宗像」編集部

※　※

宗像大社歌会 俳句作品集（一七三）

藤沢玄洋子
衣ずれの音厳かに茅輪くぐる

東郷有吉春子
ままごとの花崗なけり夏の風

名古屋野崎傳三
三宝や献饌の西瓜もであます

土穴八尋恒夫
茄子買って話しはずみて置き忘れ

津屋崎浜津鴻浪
遠花火いさり火だけの見える窓

田熊力丸一郎
汗流す一日夕餉の酒の味

大井吉田ますみ
風蝕に堪え墓石に苔の花

福間広渡一寸毛
天主堂襖の蓋や時雨けり
海舟のロマンス哀しひさの墓
（長崎にて）

宗像岡田無名
宮司の参道ひかし蝉しぐれ

第六回 宗像大社献詠短歌大会 開催要項決定!!

第六回、宗像大社献詠短歌大会開催に関する運営要項が、去る七月十三日の宗像大社短歌会運営委員会に於いて左記の通り決定致しました。

――◇――◇――

◇第六回
宗像大社献詠短歌大会要項◇

一、期日　昭和五十二年十一月十一日（金曜日）
午前十時開始
宗像大社清明殿

一、会場　宗像大社短歌会

主催　宗像大社短歌会
後援　毎日新聞社

一、大会式次第
イ、献詠神事　於会場
ロ、開会
ハ、挨拶
ニ、講演
ホ、選者紹介
ヘ、選考方法説明
ト、相互評
チ、入選歌発表
リ、表彰式
ヌ、閉会

一、募集要項
1、締切期日
昭和五十二年九月五日
消印有効
2、詠草　一人一首
未発表のもの を原稿用紙に楷書で明記の事
（住所氏名を付記）
3、選者（敬称略）
山中茂樹（宗像）
若川潮（門司）
久原喜三門（小倉）
田口自汀（筑紫野）
持田勝穂（福岡）
4、会費　五〇〇円
献詠送付の折、小為替又は切手にて納入下さい。
5、賞
選者賞　三名
互選賞　五名
佳作入選　十名
6、送付先
〒八一一―三五
福岡県宗像郡玄海町田島
宗像大社々務所内
献詠短歌大会係　宛

一、その他
応募詠草は一冊の冊子に集録、十月中旬頃全員に送付致しますので原稿用紙に住所氏名、〒番号を明記願います。

一、備考
1、当日は晴雨に不拘実施
2、昼食自弁
（境内周辺に食堂、パン屋等有り）
3、交通
国鉄赤間・東郷・福間各駅、西鉄電車津屋崎駅下車で西鉄バス神湊線にて宗像大社前で下車。
4、その他詳細についての問い合せは
献詠短歌大会係
09406②1311
以上

赤星端（久留米）
佐野とき江（浮羽）
竹尾正子（宗像）
久保田端一（若松）
加野喜久親（大宰府）

！こんな宗像になったら良い！「宗像を考える会」

宗像青年会議所
理事長　片山一美

世代は日本人口の過半数を超えました。散った三百十万人の戦没者のめい福を祈り、平和への誓いを新たにしたいものです。

この戦後 間もない 昭和二十三年、ある青年実業家の「ある挫折」が青年会議所運動の起りとなり、二十六年日本青年会議所が発足し、現在に至っています。

宗像青年会議所は、昭和五十年八月独自の運動形態をとりながら十周年を迎え、日本青年会議所に入会の決意を表明、同年十一月二十三日認承証伝達式を挙行するに至りました。宗像大社第二、第三宮駐車場に会場を設営し、一千数百名の登録会員の参加並びに郡内外の知名士の御出席を得て式典の祭行を見ました。出光興産興会長石田正実氏の記念講演を寒風吹きすさぶ中に耳をかたむけたのも良い目に新らしい事です。

以来三年目を迎えました。五十名の会員は、「明るい豊かな社会」を築きあげる為、青年の英知と勇気と情熱を持って各々の事業を展開しております。

過去、美化運動（城山登山道整備海岸清掃）や青少年健全育成事業（稲尾野球教室、君原、重松ランニング教室）など地域住民と連係を取り乍らの社会奉仕事業や、個人の修練の場を持ち自己開発に取り組んでいます。

なかでも全国六二〇の会議所五百名の会員が毎年創立日（九月三日）を記念して展開する統一事業は、各地域社会にユニークな発想と評価をもたらしております。

本年度全国統一テーマは「地方自治を見直し、自治意識の高揚を！」です。

変遷し続ける宗像、その大きな特徴を「都市化の進行」と指摘する人もあります。難解な諸問題をかかえ変化する中では、心の触れ合いをさらに深めてゆく必要があり、コミュニティづくりが強く要請されます。これら諸問題には、地方行政と対決するのではなく、住民一人一人が考え問い直す必要があります。

当会議所は「むなかたは一つ」をサブテーマに、津屋崎、福間、宗像、玄海、大島と町村長をかこんでの予備会議を実施して参りました。誌上を借りて多忙の中御協力下さった町村長をはじめ御出席の皆様方に厚く御礼申上ます。

来る九月十一日宗像中央公民館に集まり、「郡民対話集会」を開催致します。

当日は「人のために尽かしようコンテスト」の発表表彰も致します。この事業は、「人の為に何かしたい」と思っておられる個人や団体に参加してもらい勇気をもって実行していただくものです。さらに宗像郡内に在住の人達（小・中学生含）による「こんな宗像に私は住みたい」という絵画展示も併せて行ないます。少年女達の明日の宗像のユートピアが絵に作文にイラストになってでます。

当日宗像中央公民館につどい、明るい豊かな町づくりの為一層の御協力をお願い申上げるものであります。

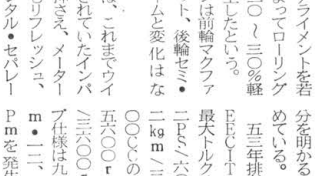
話題の新車をみる（二九）

新型レオーネ SEECITの巻

現在、国産乗用車はおよそ五十数種あり、注目の五十三年排ガス規制実施までには、尚かなり時間的な余裕がある。周知の通りニューモデル、モデルチェンジは来年の四月から、継続生産車なら五四年三月からでよいが、大方の車種は今後一年の間に五三年対策に切換えられるとみてよい。されば、今後月二～三車種の五三年規制適合車が登場してもよい勘定である。

扨て、業界初の五三年排出ガス適合車は去る四月一日発売された富士重工のスバル・レオーネであり、フルモデルチェンジされている。

新レオーネのスタイルは、ウエストラインとリーフラインに従来モデルの印象が認められるものの、フロントとリヤ・エンドは大幅なデザイン変更を受け、モデル全体のイメージは以前の武骨イメージも抜け、流動感と洗練されたボディの金輪は五〇～六〇ミリ大きくなり、足回りではリヤ・トレッドを四〇ミリ拡大。フロント・ホイール・アライメントを若干変更。これによってローリング特性や操舵力（二〇～三〇%軽減）が大幅に向上したという。



美しい斬新なものとなった。

サスペンションは前輪マクファーソン・ストラット、後輪セミ・トレーリングアームと変化はない。

内装については、これまでウイークポイントとされていたインパネの高さを低く抑さえ、メーター回りのデザインもフレッシュ、室内に「ホリゾンタル・セパレート・デザイン」と呼ぶ2トーン分割法を採用している。すなわち、シート・クッション部分から下方をブラック・トーンに統一、上部分を明かるいソフトカラーでまとめている。

五三年排ガス規制をパスしたSEECITエンジンの最高出力と最大トルクは、一四〇〇ccが七二PS/六〇〇rpm、一〇、二kgm/三六〇〇rpm、一六〇〇ccのユーキャブが八二PS/五六〇〇rpm・一二、〇kgm/三三〇〇rpmで、ツィンキャブ仕様は九五PS/六四〇〇rpm・一二、三kgm/四〇〇〇rpmを発生する。この五三年対策は、これまでのデバイスに「EGR」「吸入温度自動調整装置」「2次空気クリーナー」を加えたもので、対策に伴うパワーダウンはなく、燃費は改善向上しているという。

この他の特徴としては、①一六〇〇・4ドア・スーパーカスタム②一六〇〇ツーリング5（オーバートップの5段ミッション車・トップギヤ比0、七八九）の追加③装備の拡充化④ヒーター及ベンチレーションの強化⑤トランクルーム開口部面積の拡大⑥安全装備の充実化⑦全車の五～一五kg軽量化などがあげられる。

＊　＊

「年中人事」

仲人（なこうど）
婚姻の成立に男方から女方に連絡する役であったが、後には媒介の媒介人となった。「日本書紀」の武烈天皇の条に、太子が物部鹿鹿火の大連の女の影媛を求めようとして、影媛の家に媒人（なかだち）を遣わして、相会の日を約せしめたとある。

のち仲人は形式的に夫婦の婚約をまとめる人をいい、両方の事情にくわしく、その世話によって見合をし、結納（ゆいのう）をかわし、婚礼に至るのである。仲人は縁を結ぶものであるから、夫婦そろったものがなるのが例で、また表向きには知名な人を頼んで、仲人に立てることがある。また中国の故事によって仲人のことを「月下氷人」という。

結納（ゆいのう）
婚姻に先立って男の方から贈物を送り婚姻を約束することである。「日本書紀」履中天皇紀に、天皇が皇太子のとき、羽田矢代宿祢の女黒媛を妃にするために、「納采」を済ませたとある。これが後世の結納で、近世には「たのみのしるし」ともいった。

結納に贈るものは定まっていないが、江戸時代の一例をあげれば五荷五種（斗樽十・肴五種、肴は昆布・鰹・塩鯛・串鮑・鰹など）それに小袖一重（つは表裏共白一つは表紅、裏は不定）・帯一筋を添える。しかしこれは貧富によってかならずしも一定しない。

婚礼（こんれい）
結婚における儀式は時代と共に種々変化した。結婚の礼式では、婚礼の当日のもので、それ以前に行われる準備的なもの、以後の儀式との連りが考えられ、時代を降るに従ってそれらが次第に整備されてきた。

古代の例は明らかでないが、初めは女子の家で婚礼が行われるのが多く、伝説にも火遠理命が豊玉媛をもとった時これを招じ入れて皮畳・絹畳を敷き二取の机代物」を置いて飯食物を饗応したことが見える。また求婚の交渉に人を立て、婚約物を贈ったことなどは、仁徳天皇の朝、雌鳥（めとり）皇女を納れるために、隼別皇子を媒（なかだち）とされたことや安康天皇が大泊瀬皇子のために、大草香皇子の妹幡梭皇女をもうたところ、大草香皇子にまこんで押木珠縵を献じて婚姻の信物としたことが見えている。

わが国の場合では、嫁入りは古代から平安時代、嫁入りは鎌倉時代から江戸・明治時代に行われている。平安時代の嫁入りの礼を「江戸次第」によって見ると、当日、本家に親しい者を使として消息があり、本日参入のことを知らせる。母屋・庇・出居・侍所・随身所・雑色所・牛飼所などそれぞれ弁備する。さて布袴姿の婿が牛車に乗ってきて門の車寄で下車する。前駆が松明（たいまつ）をとっていくと、衣冠の脂燭差し二人が中門を出て御前火で脂燭に火をつけてみちびく。婿君は中門から入り、寝殿の厩簡からのぼる。沓取人が沓を階下でとり、その沓を舅姑が相共に懐中して臥す習慣である。

脂燭の人は帳前に至って火を燈楼に移す。この火は三日間消さない。婿君は帳内に入り、姫君は鬢と濃袴をつけて後から出る。婿君は装束をとき、会をおおう。物吉の女という上臈がこれをおおう。次に餅を供する。小餅を盛った銀盤二枚それぞれに居があり、鶴の箸基に銀箸一双と未箸一双を置きこれらを乗禮地螺鈿（つでん）の筥箸にすえる。これが三夜餅であるが、これを食べた夫婦年久しく子孫繁栄者が調達する例である。婿君は餅三枚を食べるが、これを食切ってはいけないという。この陪膳は男がするので後世と異なる。

次に姫君の家からとのえられた烏帽子・狩衣を婿君が着て帳前に出て、ここで膳を供する。陪膳が羽根を広げ向きあった形の銀